

田辺校地の発掘調査から

辰 巳 和 弘

天神山遺跡の調査

田辺校地における発掘調査は、昭和四三年の八月から一二月の間に、三次にわたって実施された天神山遺跡の調査が最初です。

天神山遺跡は弥生時代後期（二〜三世紀）の集落跡で、一八戸の竪穴式住居跡が、集落中央の広場を囲むようにめぐって、弥生時代の集落形態を知るのに適した遺跡です。一八戸という住居跡の数は、数回にわたる建て替えの結果の数であり、常時は四〜五戸程度からなる村落であったと推察されます。住居跡の平面形は凹形が九戸、方形が八戸、五角形が一戸で、建て替えの様子から、凹形住居から方形住居へと変化していったことが窺えます。

天神山遺跡からはスキ先や刀子、鍬などの多くの鉄製品や、留金具と推察される青銅製品などの金属製品と、鉄製品などを研磨するために使用されたとみられる砥石も各住居跡から出土し、集落規模に対して、多くの金属製品を出土したことも全国的に著名な遺跡です。金属器とともに磨製石斧や石鏃などの石器類も出土していますが、天神山遺跡に住

んだ人々の使用した道具の主流は鉄器へと移っていったようです。

この遺跡は木津川流域を臨む海拔約八〇メートルの丘陵上にあつて、その下にひろがる平地との比高は約四〇メートルもあります。こうした立地は水稻耕作を生業とする当時にあつて、適したものとはいえません。同じころには低地にも集落遺跡が存在することから、天神山遺跡のような丘陵上に立地する遺跡を考古学では「高地性集落」と呼んでいます。こうした高地性集落の出現は、何らかの政治的・社会的緊張によるものと考えられ、『魏志倭人伝』にみる「倭国大乱」との関係が考えられており、古代国家成立前史を語るうえで、天神山遺跡は重要な遺跡なのです。

天神山遺跡の発掘調査以来、田辺校地の整備の進行に伴い、校地学術調査委員会では、継続的に校地内の遺跡の確認や発掘調査を実施してきました。その後の主な発掘の成果をいくつかご紹介しましょう。

下司古墳群と古代土地制度

田辺校地内の遺跡は、その大半が校地の南側に添って流れる普賢寺川に面した丘陵南斜

面に立地しています。その中程、新宮社の西寄り斜面の海拔七五〇メートルの地点に横穴式石室を埋葬施設として構築した小円墳群があり、これを下司古墳群と呼んでいます。この古墳群は、同志社がこの地域を購入する以前の、昭和三八年にそのうちの三基が京都府教育委員会によって発掘され、七世紀前半に相いついで築造された、古墳時代の最後の時期にあたる古墳群であることが明らかとなりました。

昨年、下司古墳群にはさらに数基の古墳が存在することが明らかとなりました。それともなつて、古墳が分布する地域の全域につ



まむし谷窯跡

いて、詳細な測量調査を本年の六月に実施しました。その結果、丘陵南斜面に立地する古墳群の東側と西側には、浅い谷状の地形が認められ、これによって古墳を築造する範囲（造墓域）が区画されていたということが推察されるようになりました。その東西の谷状地形によって仕切られた造墓域の幅は、約一〇〇〜一二〇メートルで、これは古代の条里制の単位として使用された一町（約一〇九メートル）に近い数字であることが注目されます。いずれにせよ古墳群の形成に、土地利用上の規制が加えられていたことは確かかなようです。

古墳群の範囲を溝や谷状地形により区画することは、滋賀県や山口県・静岡県などでも明らかになつてきており、後期古墳研究上の新しい視点を示すものと言えるでしょう。

須恵器を焼く人々

下司古墳群の築造が終つたころ、須恵器を焼く工人達が普賢寺川の流域に住み、丘陵斜面に

窯を築き、須恵器の坏や甕などを焼きました。これまでの発掘調査では、まむし谷窯跡と新宗谷窯跡（まむし谷）の二基の窯跡が発掘されています。

後者は七世紀後半に営まれた窯でしたが、中世に付近一带に建設された館の造成に際し破壊され、須恵器片や粘土を使って築いた窯の壁の一部が発掘されただけです。

一方、まむし谷窯跡の発掘は昭和五六年に実施され、須恵器を焼成中に何らかの事情で窯の天井部が崩落したため、その時点で窯を放棄したとみられる状態で、窯が検出され、窯内には、須恵器がぎっしりとつまっていました。工人達にとっては焼成途中で窯を放棄せざるをえなかつたわけですが、私達研究者にとつては、そのお陰で、一時期の須恵器のいろいろな器種とその器形を明らかにすることができ、さらに焼成時の窯詰め状態をも知ることができ、大きな成果をあげることができました。このまむし谷窯跡の年代は八世紀前葉のころと考えられています。

普賢寺谷居館跡群

その後、鎌倉時代まで、田辺校地内におけ

る人々の積極的な活動の跡は認められませんが、しかし一五世紀後半になると、にわか丘陵への開発が著しく進み、普賢寺谷に面して延びる丘陵の小支脈の先端部には、ことごとく、当時この地域に居住した土豪たちの居館が建設されたようです。そうした居館はいずれも端部に近い丘陵上を平坦にし、その後にはコの字状に土塁をめぐらし、その内側に居館を建設し、さらにその周囲にも付属する建物を建設するために段状に丘陵裾部を造成したり、防禦のために堀を掘ったり、土塁を築いたりしています。

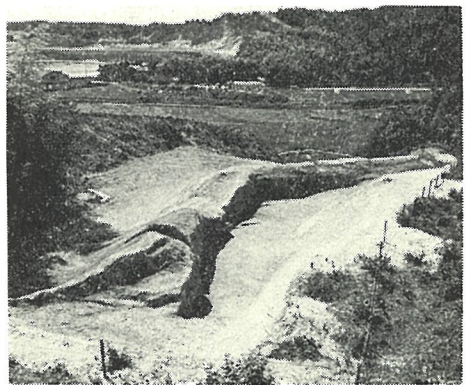
昭和五二年に発掘調査を実施した都谷館跡もそうした居館の一つでした。この居館跡は一五世紀中頃から一六世紀後葉頃まで存続したとみられる遺跡で、堀や土塁をともなった丘陵上の平坦面からは、地下貯蔵庫とみられる土壇や、建物の軒先を示す雨落溝などの遺構と、中国製の染付皿・青白磁瓶や皿・古瀬戸壺・信楽焼播鉢・常滑焼甕をはじめ、瓦質の羽釜や甕・土師質皿などの遺物が出土しました。

田辺校地内では、都谷館跡を含めて、三カ所の中世居館跡が確認されています。都谷館

跡が建設されたとみられる一五世紀中頃といえ、一四六七（応仁元）年に京都で応仁の乱がはじまり、戦国時代に突入した時期であり、一四八五（文明一七）年には南山城一帯の宇治・久世・綴喜・相楽四郡の国人三六人を中心とした「山城の国一揆」がはじまるという動乱の時代なのです。このような政治的・社会的動揺が、普賢寺川流域の平地に生活していた人々の住居を丘陵へと移動させ、さまざまな防禦の施設をつくらせた原因なのでしょう。

弥生時代後期の倭国の大乱と、戦国時代という、日本史上の二大動乱が、丘陵上に顕著な遺構を残すことになったことは興味あることとです。

また本年六～七月には校地内の普賢寺に隣接する地域で、普賢寺の寺域を示すためや、寺の防禦のために建設されたとみられる大規模な土塁（堤状遺構）の一部を発掘しました。この土塁は、現在の普賢寺の駐車場横からはじまり、東北方向へ延びる、総延長二二〇メートルにもおよぶ、大規模なもので、校地内には約四〇メートルが含まれ、その部分の発掘をしました。発掘した部分での土塁の



普賢寺東方で発掘された堤状遺構

最大幅は約四メートル、高さ約三・五メートルで、自然地形を削り出したり、土砂をたたきながら積みあげたりして造っています。この土塁の年代は不明ですが、大規模な工事の様子から、居館跡と同じ時期かと推定しています。中世における地域集団の大きな力をまざまざと見せつけられたと思います。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）